

「三中校長脳卒中で倒れちゃった⑧」

【障がい者として生きるということ②】

復帰してすぐの1月末、私がある先生の授業を見学させてもらうために校舎内を歩いていると、廊下の向こうから、1人の先生と先生に連れられた元気そうな男子生徒がやってきました。生徒が私に気づきました。彼は私の歩き方が気になったようでした。その時、彼が面白いことを思いついたような表情をしたように見え、次の瞬間、ヒョコ、ヒョコと足を曳きづつて歩く私のまねをしたように見えたのです。

隣の先生はこちらを向いているので、生徒の様子には気づいていません。どうしようかなと生徒の顔を見ながら考えました。彼は私が見ているのに気づき、まねをするのをやめました。授業開始のチャイムのなる直前であり、周りには誰もいません。復帰間もないこともあり、その生徒がどういう子なのかもわからないし、後で隣にいた先生に訊いてみようと考え、その場では声をかけることはしませんでした。

放課後、その先生に話を聞こうと校長室に来てもらうと、驚いたことに、「さっきすれ違った時のことですよ」とその先生から話し始めたのです。「校長先生とすれちがった後、こんなやりとりがありました。生徒『あー、びっくりした』先生『どうしたん？』生徒『校長先生に、にらまれたから、怒られると思ったら、怒られへんかった』先生『怒られるようなこと、何かしたんか？』生徒『歩き方まねした』先生『そらあかんやん』生徒『わかってる』先生『なんでそんなことしたん？』生徒『わからん。何となくやった』先生『校長先生が何であの歩き方なのかは知ってるか？』生徒『知ってる。脳の病気をしたからやろ』先生『校長先生悲しいと思うで。もう絶対せんといてや』生徒『わかってる。もうせえへん』」

私は感心しました。生徒が「怒られると思った」ことを自分から先生に話し、それを「あかん」と認め、「もうせえへん」と約束しているのです。まねをしたかどうかなんて、人の心の動きですから、「そんなことしてない」と言い張ることもできるし、特に今回は周りで見ている人もいなかったのです。正直でまっすぐな対応であり、その生徒と先生の信頼関係も感じられ、とても嬉しい気持ちになりました。

そこで、生徒本人に来てもらい、正直に先生に話をしてくれたことなど、嬉しい気持ちを伝えました。そして1つだけ気になること「なぜまねをしてしまったと思うか」を、もう一度私から聞いてみました。生徒「ほんまにわからん」私「面白いからかな？」生徒「そうかなあ」私「面白い動きをまねしたら、それを見て笑ってくれる人がおるやん」生徒「それはよくある」私「みんなが笑ってくれそうな動きやと思って思わずまねしたんかな」生徒「ほんまや。たぶんそうや」私「かっこいいと思ってまねしたん違うよな」生徒「うん。ちがう」私「かっこいいと思ってまねしてくれるんやったら私もきつと嫌じゃない。こういう面白いなと思う動きって、バカにするとまでいかななくても少し下に見てるんちゃうかな」生徒「うん」私「だから、まねして欲しくない気持ち、わかってくれるか？」生徒「よくわかった」

私が、以前から気になっていたテレビに、「運動が得意でない芸人が運動している様子を見て笑う」番組がありました。最初は私も笑いながら見ていたのですが、どうして違和感を感じるのかを考えると、自分がそういう動きをする人を下に見てるんやなあという想いに気づきました。そもそも「笑い」は、その社会の文化を背景に非常に高度で複雑な作用により起こるので、単純な分析はできないと思います。また、芸人さんは、敢えてそういう動きをして、それを仕事にしているのだから、番組が悪いとまでは言いません。でも、それを悲しい思いで見ている人がいるかもという捉えも必要だと私は感じたのです。

その生徒に、今回の出来事について集会で話をしたいかと聞くと、笑顔で承諾してくれたので、全校生徒に話しました。入院中、様々な事象を想定していましたが、そんなことは全く起こらず、逆に事象ともいえない出来事で三中の生徒の素晴らしさを知ることになりました。

マイナスの想定をしていた自分が恥ずかしくなったのでした。

【不定期コラムNo.10】へつづく

※これまでの不定期コラムは本校ホームページ「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

第三中学校ホームページ

第三中学校ホームページでは子どもたちの様子やお知らせなどを情報発信しています。ぜひ、ご覧ください。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

